
真夏の夜の三部作

雪場

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真夏の夜の三部作

【Nコード】

N8537D

【作者名】

雪場

【あらすじ】

タイトル通りの、真夏の夜の、平和のお話。全3部＋で構成。

第一部

真夏特有のむっと湿った風が、和葉の頬を浮気になでて通り過ぎる。

風自体より涼しげな、風鈴の音を聞きながら、和葉は縁側から突き出した足をばたつかせる。

夜になってようやく蝉もその盛大な演奏をやめ、密度の高い空気をかすかに伝わってくるのは居間のテレビの音だけ。

こんな時間が、ひそやかな和葉のお楽しみだった。

「ちょっと和葉」

不意の父親の声に楽しみを中断させて、どうかしたん、と和葉は訊ね返す。

「お客さんや」

彼はそれだけ言うとニツと笑い、居間へ戻っていった。

玄関から庭を回り、闇夜に白い歯を浮かび上がらせて平次が縁側へ現れたのはそのすぐ後。

「花火でも、やらへんか？」

ぶら下げていた白いビニール袋を軽く持ち上げ、平次は言った。

和葉が振り返ると、気を利かせたつもりか居間にはもう父の姿はなかった。

「珍しいやん、平次のほうからこんなこと言い出すなんて」

たまにはええやろ、と誤魔化しながら平次はマッチを擦り、ロウソクへと火を移す。

和葉の持ってきたバケツに平次がマッチの燃えさしを投げ入れる。ジュツと湿った音がして、あたりに燐の燃えた匂いが広がる。

「さて、そろそろ始めよか」

居間の電気も消え、平次の顔を照らしているのは手に持ったロウソクだけ。

ちらちらと炎が揺れるたびに、前髪の影が大きさを変えて顔を覆う。

「何人の顔じろじろ見とんねん、はよ始めるで」

ジト目でそう平次に指摘され、はっと我に返った和葉は、別に平次の顔見とったわけとちゃうし、と弁解してからビニールの中へ手を突っ込む。

「ほんならアタシは線香花火から」

「せやったらオレも同じのにしよか」

真似せんどいてや、そんな和葉の抗議を笑って受け流して、平次は紫と黄色に彩られた紙^{こよ}縊りに火をつける。

そのまま和葉のほうにもロウソクを押しやる。
軽くうなずいて、和葉も紙縊りに火をつける。

真夏の夜の庭に二人。

湿った風が風鈴を揺らすついでにロウソクの火を消して立ち去っていった。

「あつ、火、消えてもうた」

一瞬真つ暗になり、和葉には平次の、平次には和葉の顔が見えなくなる。

すぐに平次と和葉の線香花火がオレンジ色の火花を撒き散らし、淡い照り返しに二人の顔が染まる。

パチリパチリと頼りない音と火花を上げ、二人の顔を照らし出す線香花火。

あたりに甘つたるい火薬の匂いが立ち込める。

和葉は自分の持つ線香花火から目を離し、ちらりと横目で平次の顔を見る。

何も読み取れない、無表情な目をしたまま、自分の顔を浮かび上げらせる火花を見つめる平次。

そんな平次の姿を見ながら、どうして平次は今日、急に「花火をしよう」なんて言い出したのだろっ、と和葉は思った。

ロウソクよりも、もつとぼんやりとした灯りに浮かぶ平次。
火花が一つ消えるたびに、その姿が闇に消えそうになる。

思わず和葉は、自分の線香花火を平次へと近づける。
自分の線香花火でも、平次を消えないように、照らし出そうとする。

「どうかしたんか？」

急に増した光に、平次が顔を挙げて訊く。

「えっ、ああ…、花火、きれいやねって」

「せやな。たまにはこういうのも悪くないな」

そう平次が答えた途端、ふっと火花が止み、二人の手の先から丸い光の粒がぼとりと地面に落ちた。

オレンジの火球が真つ暗な地面に吸い込まれる。同時に平次の顔も闇に吸い込まれ、和葉には見えなくなる。

あっと思わず声を出しそうになる。

「消えてもうたな」

参ったな、と付け加えて、平次はポケットからマッチを取り出し、擦った。

再びともったぼんやりとした灯りの先に、平次は見つけた。
小鳥のように震える影を、隠しきれなかった和葉の姿を。

ゆっくりと和葉の肩に手を回し、心配すんなや、と伝える。
心の中が見透かされたようで、少し驚いた表情をしながらも、和

葉はこくりとうなずいた。

「もうこんな時間か」

ロウソクに炎を移した平次が、腕時計を覗き込みながら言う。

「せやったら、玄関まで送っていくわ」

そう言つて和葉は、二人分の花火をバケツの水に漬ける。

ジツという音と白煙と一緒に、甘ったるい匂いが強くなる。

「また花火、持ってきてな」

和葉が微笑みながら言う。

「また花火、持ってきたるわ」

ユラリユラリと揺らめく灯りの中で鸚鵡返しに言い、平次も微笑んだ。

第一部（後書き）

お久しぶりの方も、はじめましての方もいらっしやると思います。
なにせ約半年ぶりですから……。改めまして、雪場と申します。

リハビリも兼ねた復帰作は、やはり平和になりました（笑）。当初
の予定を大幅に変更したところのある作品ですが、そのへんは最後
にでも書きたいと思います。

ブランクもありまして、文体など多少書き方も変化したかと思いま
す。相変わらず、半ば手探りの状態ですが（苦笑）。少しずつ、文
を書くことにも慣らしていきたいですね。

ちなみに、タイトルはシェイクスピア『真夏の夜の夢』を元にさせ
ていただきました。

第二部

久しぶりに東京来て、蘭ちゃんと買い物に出かけた帰り。

大きな荷物をそれぞれ抱えて、コナン君も入れて三人で歩いとるアタシ。

なんやろ、めっちゃ楽しいのに、なんか足りてへんような気がする。

つい立ち止まって、後ろを振り返ってまう。

「どうしたの？和葉ちゃん」

「ううん、なんでもないよ、蘭ちゃん」

「それにしても新一ったら、いつまで事件追っかけてんのかな」
大袈裟にため息をついた蘭ちゃん。

「そんなに心配せーへんでも、工藤君やったらきつと戻ってくるって」

励ましておいて、やっぱなんかが頭の隅に引っ掛かる。

工藤君……。なんか、工藤君と関係あったような……。せや、思い出した！

「なあなあ蘭ちゃん、平次は？」

平次や、何で平次がおらへんのやろ？

アタシが東京来るときはいつも一緒やから、どっかで待つとるんやろうけど。

そう思うつったんやけど、蘭ちゃんは何故か“狐につままれた”みたいな顔になって、

「ねえ、平次君って誰？」

……は？

「その平次って人、もしかして和葉姉ちゃんのお友達？」

嘘やろ？なんで？蘭ちゃんとコナン君、二人してアタシからかつとるん？

「平次やって。知らんわけないやん。何回も会うつるんやし、な？」
「そんなこと言っただって……コナン君、思い出した？」

コナン君は。黙って首を横に振った。

「もうええ、自分で探すわ」

携帯やったら、平次に連絡つくよね。

蘭ちゃん、アタシ驚かそうとしてもそう簡単には騙されへんよ。

えっと、平次、平次……っと。

平次のおばちゃんやろ、同じクラスの藤本さんやろ……えっ？

無い。

何遍見直しても、「平次」その二文字が見つからへん。

何でなん、平次、どこ行っただん？

「平次……」

はっと気がついて、和葉は蒲団を跳ね除ける。

「夢やったんか……」

冷や汗でべったりと張り付いたパジャマ。

気持ち悪いけど、それでも、あの夢ん中よりはよっぽどマシだと和葉は思った。

これが初めてのことじゃない。

この前は、気がついたら一人で学校に行っていて、帰りに慌てて駆け込んだ平次の家で「うちには子供、おりませんけど」そう突き放される。そんな夢だった。

「あゝ、もう、何でなん？」

和葉が寝癖のついたままの頭を抱え込むと、後ろで目覚ましが大に鳴り始めた。

夏休みに入って、少し経つ。

いつものように、和葉は扇風機の前に座ってテレビを見ていた。

不意に、呼び鈴が鳴った。

誰やろ……、そういぶかりながら立ち上がり、玄関を開けた。

目の前に立っていたのは、あの野球帽を被り、大きなスポーツバツグ肩に掛けた、平次。

普段やったら、「ひょつとして、また東京行くん？何でもっと早よ連絡くれへんかったん、アタシも準備しなアカンねんから」そう言つて、二階へ荷物まともに駆け上るところだっただろう。だけれども、そのとき和葉が口に出せたのは、

「平次……どっか行くん？」

その一言だけ。

いつもより深めに帽子を被った平次。

目が陰になって見えない平次には、それだけしか言わせないだけのオーラがあった。

「ああ。ちよつと工藤から連絡あつてな。事件手伝つて欲しい、言われたんや」

「どこ、行くん？」

「とりあえず東京で待ち合わせやけど……。そつからどうなるかは、まだ何とも、な」

「やっぱり……」

気がついたらそう言っていた自分に、和葉は驚いた。

「ほんなら、また後で電話するわ」

そんな和葉を知つてか知らずか、平次はスポーツバッグを掛けなおし、くるりと回れ右をした。

待つて……まだ行かへんで……

そんな感情が、さつきから、理屈より先に溢れてくる。

直感的に、そう思つてしまう。

もう理屈を考えるのは止めていた。

今和葉にあつたのは、平次がもの凄く遠くへ行つてしまふ、そんな予感だけ。

「あ、あのさ、平次」

平次が振り返った。

「絶対、戻ってきてよ」

平次は何も言わず、右手を軽く挙げただけだった。

平次、らしくもなく。

目は帽子の陰にしたままで、また歩き出した。

「アタシ……待つとるからね。ずっと平次のこと、待つとるからね
！」

動いていた平次の足が、その刹那止まる。

それでも、平次は振り向かない。

また、平次が遠ざかる。

和葉は、玄関に立ったまま。

平次は、どんどん小さくなり、和葉の視界から消えた。

ドアの形に切り取られた和葉の世界から、平次はいなくなった。

平次がいなくても、同じ様に流れる時間。

24時間ずつで、きつちり1日が通り過ぎる。

一体それを何度繰り返しただろう。

送ったメールの返信も返ってこなくなった。

最後に平次から送られてきたのは、月が変わる前だった。

もうこの状況に慣れてもいい、そう和葉は思う。けれども、ふと気がつくのは、いつも寂しげにケータイを見つめている自分。

前よりも、もっと会いたい気持ちが強くなった自分。

『平次は、もうアタシのこと、忘れとるかもしれへんよ』

そんな甘い声が、ときどき和葉の中に囁いてくる。

「せやけど……平次はアタシのこと、何も思うとらへんかもしれへんけど……。それでもかまへん。アタシは、平次の元気な姿がまた見えるんなら」

何度も何度も繰り返される、押し問答。
そんな真夏の夜に、ふと思う。

「これが、“待つ” ゆーこと、かな……」

初めて、蘭の気持ちが分かった気が、した。
いつまでも新一を“待ち”続けている彼女の気持ちが。

座っていた勉強机から、ぴよんと飛び降りる。

そのままカーテンを開けると、絵の具を流したように、綺麗な濃い紺色の空が目に見え込んでくる。

吸い寄せられるように窓も開け、外に顔を出してみる。

澄み切った空に浮かぶ、ビーズのような星屑。

どこまでも広がる群青と、白い煌き。

「平次もこの空、眺めてんのかな…」

眺めとるよね、きっと。工藤君も一緒に。

事件なんて、早よ解決して工藤君を、蘭ちゃんのところに戻したってな。

ほんで、戻ってきてな、平次。

そう祈るような彼女の目の前で、箒星は思わせぶりに一筋の弧を

描いた。

第二部（後書き）

どうも、ここまで読んでくださり、ありがとうございます。

さて、三部作というタイトルどおり、ゆるやかな連合を持った駄文の集まりでこの小説は構成されております。その結合はゆるやかでありまして、例えるならカイメンやサンゴの群体に近いものでしょう。

その中でわりとメインを占める今回は、実は昔に書いたものを大幅に修正したもの。最初は『“待つ”』というコト』なんてタイトルの短編でした。

そんなわけで、所々以前の面影が残ってます。だからどうだ、と言っわけではありませんが。

ともかく、最後までお付き合いいただければ幸いです。それでは。

第三部

周りを見渡しても、人、人、人…。

何度あたりをきよろきよろしても、見知った顔は一つもない。

「迷ってもうた…」

もう最悪や、と和葉は溜息をついた。

平次がいなくなつて2週間。本人がいくら隠しても、傍目から見てもはつきり分かるほど凹んだ和葉を励まそうと、女友達二人が夏祭りに誘つたのも必然の流れ。

それぞれお気に入りの浴衣に身を包み、通り沿いに広がる縁日を渡り歩いてるうちに、ひょんなことから和葉は二人を見失つてしまい、今に至る。

人の波に飲まれ、視界ゼロの状態で平均的身長の友人二人を発見できる可能性はゼロだった。

「なあ、どないしょ？」

金魚すくいでゲットした、真つ赤な和金にビニル越しに話しかけた。

口をパクパクさせている様子が自分の問に答えてるようで可笑しく、和葉はクスリと笑う。

「ま、ええか」

石畳の道の真ん中で立ち止まり、ふつと上を見上げた。

昼間快晴だった空は、今日も深い群青。あの時と、同じ空。

小さく息を吐き、肩の力を抜くと、もう一度、小さな相棒に話しかけた。

「せつかくの夏祭りやもん、楽しまな損やんな」

再び和葉は歩き出す。あっという間にその姿は雑踏の中へ消えていった。

「おじちゃん、わたがしひとつちよーだい」

懷から財布を取り出しながら和葉が頼む。和葉の目の前で、しゃぶしゃぶ台に似た機械の中に入れられたザラ目が細く白い糸に変わり、甘い匂いと共に割り箸に巻き取られてゆく。

はいどうぞ、と渡してくれる屋台の店主に、おおきにという言葉で3枚の百円玉と共に渡し、早速わたがしを口に含んだ。

口の中で一瞬縮み、堅くなったわたがしは、すぐに上品な砂糖の甘さと一緒に消えてしまう。

その感覚さえ数年ぶりで、つい懐かしく思ってしまう。

半ば無心でわたがしを食べ終え、手近にあったベンチに腰を下ろす。

慣れない下駄で歩き回ったせいで、足がばんばんに張っているように感じた。

焼きトウモロコシ、フランクフルト、焼きそば…座っている間にも漂ってくるこうばしく、それでいてねっとりとした香りが、どうしても今の和葉には好きになれなかった。むしろもっと透き通るような、爽やかなものを傷心は欲していた。

もう一度、手元の和金に目を向ける。

そう、透明な水の中で、涼しげに泳ぐ真っ赤な姿に。

まん丸な目の中に、吸い込まれそうなくらい深く黒い瞳。

こんなに真剣に瞳を見つめたのはいつ以来だろう、そんな感情がふつと芽生えた。

見つめる和葉の気持ちを知ってか、和金はパクリと口を動かす。

「なあ」

その言葉に答えるようにもう一度、パクリと小さな口が動く。

「いつになったら平次、帰ってくんねんやろ？」

パクリ。

「なんぼ忙しいゆうたって、メールぐらい返してくれてもええやんな」

パクリ。

「電話もつながらへんし、2週間も音沙汰ないのは酷いと思わへん？」

パクリ。

「アタシかて、めっちゃ心配してんねんから…」

「スマン」

「えっ、嘘…？」

「なに目え丸くしとんねん。後ろや、後ろ」

和葉が和金から弾かれたように顔を上げ、ゆっくりと振り返り、固まった。

その視線の先には、見慣れたキャップ。上着、肩。

「帰ってきたで」

平次は親指で深めに被った野球帽のつばを押し上げた。陰になっていた平次の目が現れる。

平次の頬にはまだ生々しい傷が赤い口を開き、顔中のいたるところに擦り傷と黒ずんだすすが残ったまま。右手の甲にも赤い血が滲んでいる。

「和葉？」

さつきから半ば放心状態の和葉を、いぶかるように平次が声を掛けた。

和葉の呆然とした視線を追う。

その視線は、自分の顔で止まっている、そう平次は判断した。

平次は自分の頬に手を当てる。べつとりと生暖かいものが手のひらに触れた。

ああ、これか、そう軽くうなずいた後、平次は続けた。

「工藤が前から追っかけとった犯罪組織にな…」

和葉がようやく動いた。

彼女は首を振った。

平次の話を拒むように。

代わりに、彼女は口を開いた。

「お帰り、平次」

ゆっくりとした口調だった。

平次も、なんととはなしに和葉の気持ちを理解した。

「ただいま」

平次の傷だらけの顔を、雑踏と屋台の柔らかな光が包んでいた。

+

「えっと、この角曲がって…」

ケータイのディスプレイ上に映し出される地図とにらめっこしながら、和葉は待ち合わせ場所へと向かっていた。

夏祭りの夜の次の日、突然メールで取り付けられた約束。

「ここ、かな」

着いた先は落ち着いたづくりの喫茶店。和葉が白木のドアを押すとベルが澄んだ音を立てた。

クラシックが微かにBGMとして流れる店内。パッヘルベルの力ノンかな、と和葉は思う。

そのままワインレッドの長椅子と白いテーブルの間にちらりと視線を走らせる。一番奥の席に、昨日までの待ち人はいた。

「珍しいやん、平次の方が早いなんて」

和葉が一言告げると、ウェイトレスが注文を取りに来た。平次は珈琲、和葉は紅茶をそれぞれ頼む。

「で、話ってなんなん？」

まあちよつと待てや、そう平次は濁して外に突き出した窓越しに空を眺めた。快晴だった。

「変な平次」

口を尖らせながらも、和葉は大人しく待つ。しばらくすると、珈琲と紅茶が運ばれてきた。

和葉はカップに添えられたレモンと砂糖をスティックの半分だけ入れ、黙ったまま口をつける。平次は何か考えるように外を眺めたままだった。

「なあ、何考えとるん？ 珈琲冷めるよ」

平次はやつと視線を戻す。意を決したように黙ったまま珈琲を流し込んだ。

タン、と小気味良い音を立てて珈琲カップが受け皿に戻される。

平次の視線が、真っ直ぐに和葉の瞳を捉える。

ドキリとしたのか、和葉の顔がほんのり赤く染まる。

それを見て平次も顔を赤らめ、目を逸らす。

そして、口を開いた。

「和葉、スキヤ」

「へっ？」

「せやから」

参ったな、そんな風に頭を掻きながら、平次の目が和葉を見据える。

「スキヤ」

「スキって、鍬とかあんなんと違うスキ？」

黙って平次はうなずく。

「スキーとかとも違うスキ？」

「アホ。何べん言わせんねん。正真正銘、女へんに子供の子のスキや」

平次は勢いに任せて言うど、飲み残しの珈琲カップを取り、すっかり冷めた珈琲を飲み干す。

カップを下ろす。和葉の顔を見た。

和葉の呆氣にとられたような表情がスローモーションのように崩れ、平次の目線を避けるように下を向く。

「和葉、泣いとるんか？」

視線の先の彼女は、何故かうなだれたまま。その丸みを帯びた肩が小刻みに震えている。

「だって、平次からこんなこと、言うてくるなんて……、アタシ、絶対自分から、言いださなアカンって、ずっと思ってるん、せやか

ら、せやから……」

うつむいたまま、途切れ途切れに告白する和葉。今度は平次が驚かされる番だった。

「ほんなら、和葉」

和葉が顔を挙げ、小さくうなずく。
涙に目元を光らせながら、微笑んだ。

「アタシも平次のこと、スキや」

二人を眺めるように、窓の外を涼しい風が通り過ぎていった。
長かった夏の終わりを告げる、そんな風が。

+
(後書き)

最後まで読んでいただき、どうもありがとうございます。

いろいろと紆余曲折はありましたが、復帰作は「つながりのある短編集に近い中編」という筆者の優柔不断さを表すような形態となりました(苦笑)。

大学生活が始まりますと、忙しくなるとは思いますが(研究やレポートが多いらしいので)マイペースで執筆は続けていきたいと思っていますので、また私の駄作を読んでいただけると幸いです。それでは。

08 / 3 / 18

雪場

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8537d/>

真夏の夜の三部作

2010年10月9日21時13分発行